

1 議 事 (2) 第 18 次発掘調査の成果について

1 第 18 次発掘調査の位置づけ・目的及び体制

(1) 調査の位置づけ

史跡等内容確認調査（史跡としての整備活用に必要なデータを収集するための発掘調査）

(2) 調査期間及び体制

調査（現地掘削）期間（1年次）平成30年9月18日から平成30年12月7日まで

（2年次）令和元年5月13日から令和元年8月30日まで

調査担当 鳥取県埋蔵文化財センター（～令和元年7月4日）

とっとり弥生の王国推進課（令和元年7月5日～）

調査支援 (株)アコード

調査面積 約210㎡（14.5m×14.5m）

(3) 調査の目的

青谷上寺地遺跡における弥生時代の集落北エリアの実態を明らかにする。

- ①中心域（弥生人の主な活動の舞台となった微高地）の北側に推定される海岸線の確認。
- ②平成29年度の整備予備調査（ボーリング調査）で確認した包含層を調査し、遺跡の最盛期の生活に関する情報を得る。
- ③古墳時代中期から古代にかけての土地利用の様相を明らかにする。

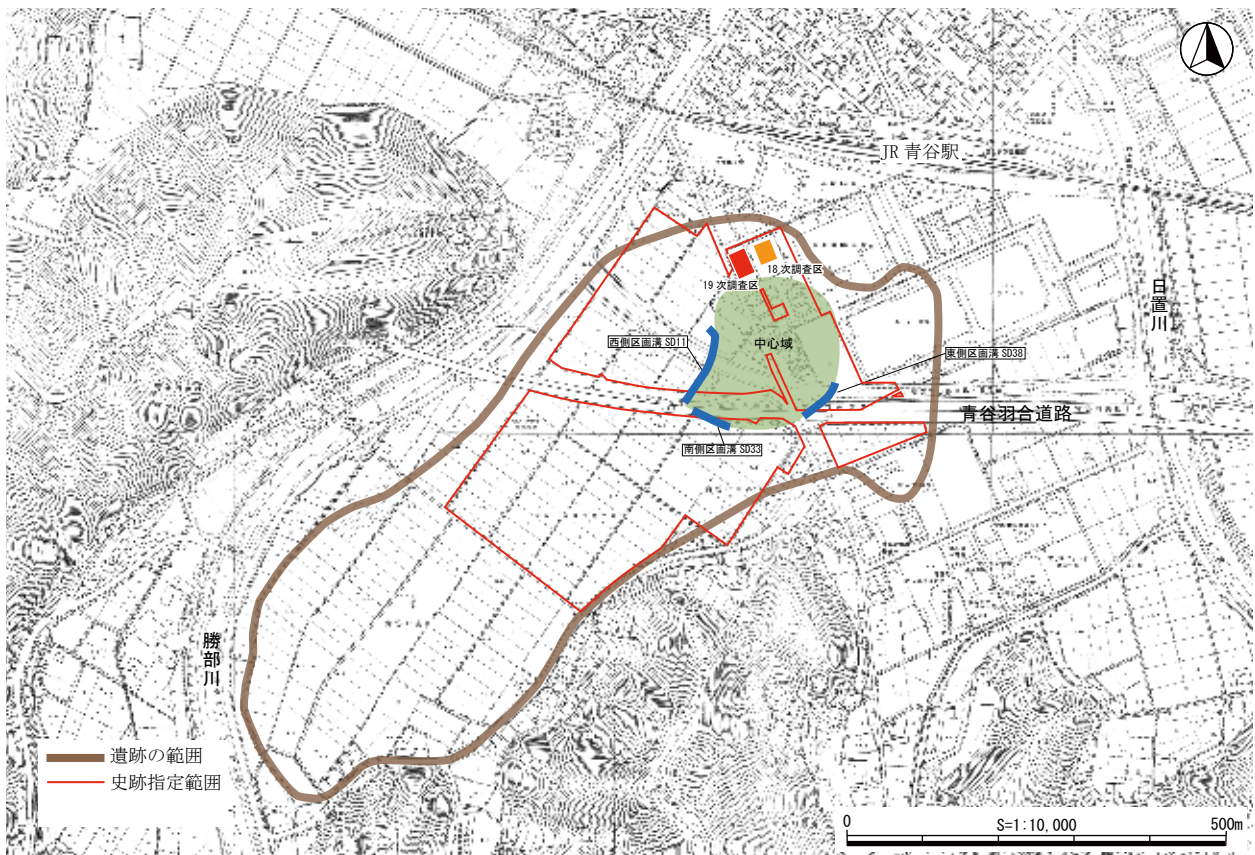


図1 国史跡青谷上寺地遺跡第18・19次発掘調査区の位置

2 第18次発掘調査成果の検討状況

(1) 造成単位の把握

第18次発掘調査においては、調査区全体で古墳時代前期前葉に行われた大規模な造成跡が確認された。造成は、矢板及び横板や杭を用いた木造構造物を芯材・土留め材とした土手状の盛土を地形が傾斜する方向に幾条も築いた後、その土手状の盛土の間を埋めていくことで平坦な地形を造り出している状況が推定された。発掘調査終了後、調査区内の各サブトレンチにて記録した土層の状況を分析し、下記のとおり大きく6段階（段階①～⑥、段階⑦は当遺構基盤層）の造成単位を把握した（図2）。各層出土土器はすべて古墳時代前期前葉であり、各造成単位に時期差はみられないことを確認した。

盛土に伴う木造構造物が帰属する段階については、横方向に設置された板を伴うものについては、板が埋め込まれている盛土の段階を木造構造物の築かれた段階と捉えた。矢板、杭のような縦方向に

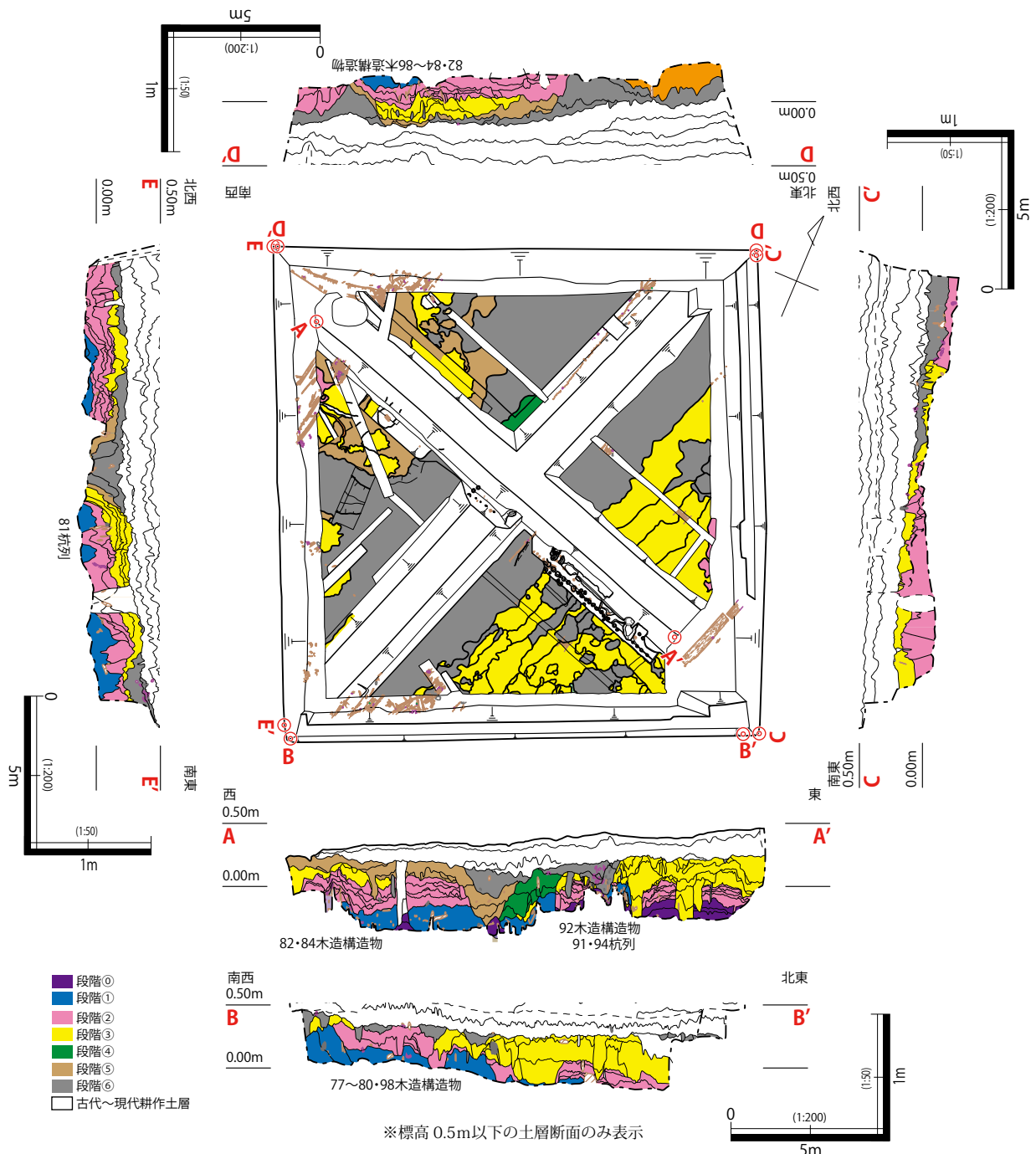


図2 令和元年度調査終了時第2面遺構検出状況（段階別色分け）

打ち込まれたもののみで構成される木造構造物については、木造構造物と盛土との位置関係（検出レベル、方向等）から判断した。

【盛土各段階の特徴】

段階⑥：貝殻片を含むシルト層及びその上層の腐食した植物片を含む黒色シルト層。

今回確認した盛土の基盤となる層。人為的堆積層か否かは要検討（土壌分析中）。

段階①：段階①の直下層である基盤層（段階⑥）のうち、最上層の黒色シルトを母材とした盛土層。

木材、木片を多く含み、当盛土段階で多くの木造構造物が築かれる。

段階②：洪水性懸濁物質起源と考えられる肌色系を呈するシルトを顕著に含む盛土

段階③：黄色系シルトを顕著に含む盛土

段階④：黒褐色系シルト混細砂を主体とした盛土。層相は段階⑥と似る。層序関係から分類。

段階⑤：灰黄褐色シルト混細砂を顕著に含む盛土。一部上面に粗砂～礫層を含み硬化する。

段階⑥：黒褐色系シルト混細砂を主体とした盛土。古墳時代前期前葉の時期を主体とする土器細片を多量に含む。

次に各造成単位の範囲について立体的に把握するため、各トレンチ内で確認された造成単位の位置を平面図に集約し（図3）、それらの繋がりを追求いくことによって、盛土の段階毎の施工想定図を作成し、造成工程の復元を試みた（図4～6）。



写真1 盛土と木造構造物との関係（92木造構造物、91・94・95杭列）

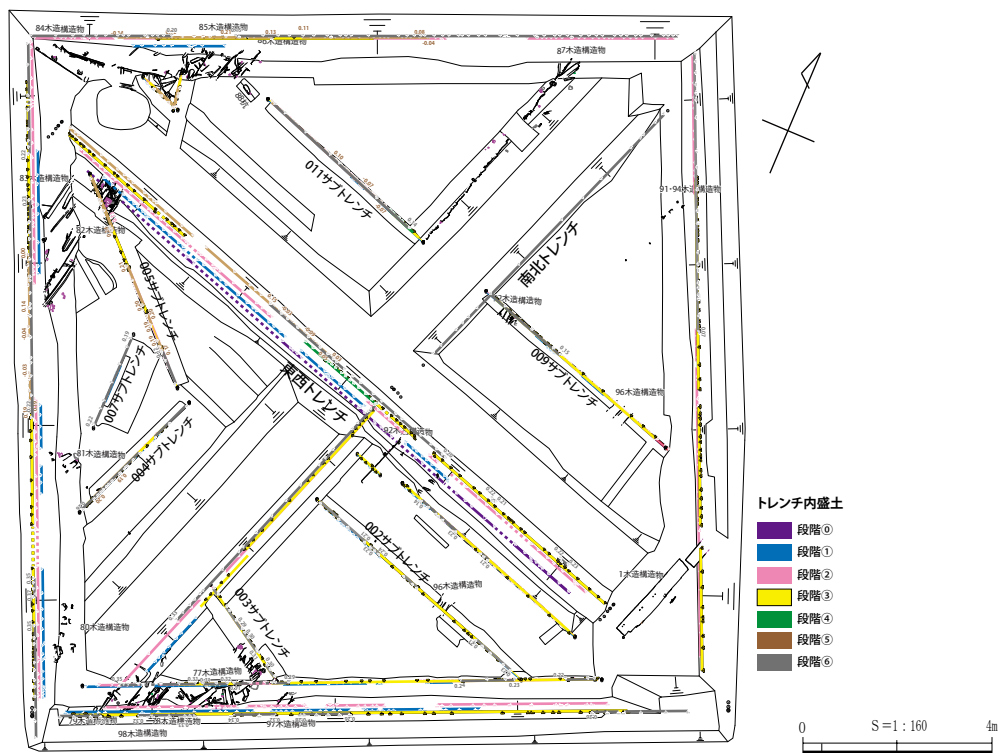


図3 トレンチ内盛土確認位置集約図